

<国際交流> :

1. ドイツにおけるスポーツクラブの現状と課題

ゲオルグ・アンデルス (Georg Anders)
(ドイツ・スポーツ科学研究所主任研究部長)

1 社会組織としてのスポーツクラブ

スポーツクラブは社会組織です。それは、自由意志による会員制、国家からの独立性、会員の利益への志向性、民主的な決定構造および名誉職的な協力労働というような指標によって特徴づけられています。一般的にスポーツクラブは、当該地区裁判所のクラブ登記簿に登録されたクラブ、という法的形態をもっており、従って、法人資格の所有者です。このことは、“クラブ”という組織が社会の一般の人と同様に法的には自主的に行動することができ、また例えば土地や建物の所有者となることができるということを意味しています。

クラブの最高機関は会員総会です。そこで選出される幹部会は、クラブを指導し、組織し、法的にクラブを代表し、外部にたいしてはクラブの利益を代表しています。幹部会は、会員総会に事業報告をする法的義務を負っていますので、会員は当然のこととしてクラブの目的や形態を決めざるをえないのです。

会員になることは、会員が規約や規則に定められている決まりや義務に従いますという形式的な加入の表明によって成立します。クラブの目的の基盤に関わる義務違反には、クラブからの除名まで含む処罰がなされます。

2 スポーツ提供者の中でのスポーツクラブの位置

1998年、スポーツクラブが統合されているドイツスポーツ連盟(DSB)の現在の到達点が示され

ました。それによると、クラブ数は86000余、会員数は2660万人でした。ちなみに、ドイツスポーツ連盟創設時の1950年には、クラブ数20000、会員数320万人でした。毎年1000から2000のクラブが新たに創設されました。クラブとクラブ会員がこのような割合で増加したことは、スポーツを住民に提供するにあたってのクラブのもった意義を裏付けています。このことは、合唱クラブや音楽クラブのような他の分野でクラブ数が減少していくのを甘受せねばならなかったことと比べると、一層感銘深いものがあります。ドイツでのスポーツは、他のあらゆる自由時間活動以上に、クラブという組織形態で行われています。しかし、スポーツクラブは、自分だけがスポーツを提供しているという独占的地位を失いました。今は、非営利領域のみならず、とりわけ営利経済領域における多数の他の提供者と対峙しています。競技スポーツにおいてすら、街路でのボール遊びにおいてそうであるように、他の組織者が現れています。

営利の(スポーツの場の)提供者のもとでは、400万人から500万人の利用者をかかえたおよそ550のスポーツ・スタジアムとフィットネス・センターが現れています。とはいうものの、スポーツクラブは、やはりスポーツの提供にとって、最も広範なそして最も濃密な網の目をつくっています。特にこのことは、スポーツクラブが地域生活の中核をなしているような中小都市と農村に当てはまります。そこでは、大都市におけるよりも明らかに高い住民の組織率が見られます。全体として見るならば、ドイツ国民の約32%がスポー

ツクラブの会員です。ただし、新たに加わった州（旧 DDR）の組織率は著しく低くなっています。

3 スポーツクラブ構造の多様性

われわれがスポーツクラブについて語ろうとするならば、決まったスポーツクラブなどというものには存在しないということを、もちろん知らなければなりません。スポーツクラブの景観は、きわめて多様であり、スポーツクラブの変種という点では一つの広大なスペクトルの観を示しています。固有のスポーツ施設と中程度の企業に相当する資金を自由に動かしているクラブがあります。これに対して、もっぱら無料の公的施設を使い、年間 2000 から 3000DM も動かしていないクラブもあります。数千の会員を擁した非常に大きなクラブもあります。今日バイエルン・ミュンヘンは、80000 人の会員を擁し、ドイツで一番大きなクラブです。また、ほんの 10 人しかいない小さなクラブもあります。もちろん大きなプロサッカークラブでは、会員をファンの意味でとらえなければなりません。このようなクラブに所属しているのは、ここで自分自身スポーツをしたいと思うのではなく、プロチームの支持者として、そのクラブが試合をするときに安い入場券を手に入れることができるというような、一定の特典を得たいからなのです。プロサッカークラブやバスケットボール、ハンドボールおよびバレーボールにおけるブンデスリーグクラブは、これらもまたプロスポーツを組織しているのですが、同様の法的形態を持ち、従って、“普通の”クラブと基本的には同じ組織構造をもっています。もちろん、このプロスポーツクラブは、経済社会のなかで、したがって資本社会のなかで、例えば株式会社のように、ますます変わり始めています。幾人かの人たちは、株で証券市場へ出て行くことを考えます。プロスポーツクラブは、さしあたって 娯楽産業の構成部分ですので、長期的には他の組織に対応して組織されていくでしょう。ここで言及されるべきこと

は、ドイツのアイスホッケーリーグがすでにこのような資本社会から構成されているということです。

多くの場合、小さなクラブは、それが最も好んでドイツクラブの“典型”と呼ばれる限りにおいて、会員数 300 までは大きくなっていきます。全てのスポーツクラブの 70% はこのカテゴリーに入ります。およそドイツのクラブの 5 分の 1 は、50 人以下の会員です。

スポーツ需要の充足において特別な役割を演じているのは、スポーツクラブの中の、大クラブです。これは 1000 人以上のクラブをいいます。すべてのクラブのほんの 6% ぐらいを占めているにもかかわらず、すべての会員の 30% を擁しています。それに対して、多くの小さなクラブ（全クラブの 70%）には、クラブ構成員のたった 4 分の 1 しかいません。しかし、小さいクラブないしは最も小さいクラブは、組織されたスポーツにとっては、極めて重要なのです。というのは、全ての組織されたスポーツシステムの柔軟性と適応能力は、新たなスポーツクラブの創設における本質的な部分に示されているからです。多くの新しく創設されている小さなスポーツクラブのなかに、最近新しい部分的にはこれまでとは別のスポーツへの関心とスポーツの形態が組織されています。従ってこのようなクラブの新たな創設は、クラブの景観の多様性を保持するために特に重要なものとなっています。

およそ 20 年前に始まったスポーツクラブの光景の分極化は、つまり、一方では、相対的に（スポーツの）供給と会員であることとの同質な小さなクラブへ、他方では、異質の、複雑な大きなクラブへの分極化が、さらに進行しています。

4 スポーツクラブの供給構造

スポーツクラブの増加についての基本的な基盤は、供給の多様性と記録の達成(Leistungen)です。スポーツクラブは、“みんなのスポーツ”という目

的設定のもとで、(潜在的な)会員の多様な興味と動機を正当に評価するために、供給を拡大し、多様化してきました。スポーツの外観は、ますます多様になり、しかしまたとりとめがなくなっています。何がスポーツに属しているのかという理解は、拡大し、スポーツ種目の数は増大し、スポーツをしようという動機はますます多様になり、スポーツの統一的構造はもはや存在しないかのように見えます。われわれは、(スポーツに)一方ではまだ記録の達成(Leistung)、厳しい節制、能率を見だし、他方では自然なおのれの楽しみと責任から解放された喜び享受の願望がこれに付け加わっています。自由時間スポーツと健康スポーツは、競技スポーツと記録達成スポーツに対して大きな意義を獲得しています。

スポーツクラブには全部でおよそ 600 のスポーツ種目と運動形態があるということが、信頼できる研究で確認されています。スポーツクラブは、目的に適ったグループに呼びかけ、彼らの組織構造を変えてきました。もちろんこのことは、多くの小さなクラブにはほとんど妥当しません。大きなクラブは、広大はスポーツ提供のスペクトルのなかで、頂点スポーツ(国レベルと国際レベルでの競技スポーツ)と大衆スポーツ(地方レベルの競技スポーツ)に対してだけではなく、競技活動に導かれていない自由時間スポーツに対してもまたスポーツの提供を約束しています。

全スポーツクラブのおよそ半分が一つのスポーツ種目に限定されていた時、大きなクラブで提供されているスポーツ種目の広さと多様さが注意をひきました。多くの大クラブは 30 種目以上のスポーツを提供していました。一般的な傾向として確認されることは、スポーツクラブが大きければ大きいほど、それだけ多くのスポーツ種目がかねらのプログラムのなかに存在するということです。大クラブは、提供しているスポーツ種目(これは多くの場合クラブでの固有の部門に組織されているのですが)の多量さと多彩さは、他の大きな部類に属するクラブからだけではなく、例えば営利

本位のフィットネスセンターのような他のスポーツ提供者からも区別されています。

全スポーツクラブを観察すると、サッカーが最も多く提供されているスポーツ種目であることが分かります。ほとんど同様に多く提供されているのがトゥルネンです——ここでいうトゥルネンは器械体操を意味していません——。それからこの後には、——幾つかの種目を挙げてみますと——卓球(全クラブの 17%)、バレーボール(14%)、テニス(12%)、スポーツ射撃(11%)、陸上(9%)などのスポーツ種目が続いています。

傾向スポーツとファンスポーツ(Trend-und Fansport)が、伝統的スポーツ供給に対する需要を弱め、伝統的スポーツ種目への供給を不必要にしたという主張にもかかわらず、伝統的スポーツ種目の意義は明瞭に示されています。伝統的スポーツ種目としてとらえられないスポーツの形態は、とりわけ大クラブに組織されています。ここにはたとえば、フィットネストレーニング、サイクリング、水泳体操、解禁トレーニングおよび障害者、外国人、特別の健康問題をもった人、あるいは高齢者などのためのスポーツがあります。もちろん、変化に備えているクラブにとっては、その時々での流行の後追いをすることなく、供給プログラムの変更にいかに早く気を配るか、またいかなる発展にこたえるべきかという問題が常に存在しています。

会員および潜在的会員の要求と期待がますます多様になったことにかんがみ、クラブ——とくに大クラブは、頂点スポーツ、大衆スポーツおよび自由時間スポーツが、それぞれのスポーツに固有の方向づけと、個人的な、物的な、また財政的な要求を、同時にクラブのなかで果して実現できるのか、またどのように実現させるのかという問題を分析しなければならなくなっています。頂点スポーツの常軌を逸した、ますます増大する、なかなか、コーチとマネージメントにおける専従化によってもたらされているコストの高さ故に、多くのクラブは頂点スポーツ的記録達成に対する財

政支出の限界に達しています。ここから結果として出てくる、クラブ供給における重点設定の必要性は、たびたび頂点スポーツへの関わりへの負担に及んでいます。その結果頂点スポーツは、次第に相対的に少なくなったクラブに集中され、同様にまた、たびたびトレーニング共同体の形態をもったクラブ協同体に組織されています。

一般的に確認されることは、競技スポーツは、確かにほとんどのクラブで提供されていますが、大きなクラブでは、ただ多くの活動の可能性があるとただです。競争から解放された（スポーツ）提供との関係では意味を失ってきています。

スポーツの利害で結びついた広範囲の組織にたいする、とりわけ大クラブの要求と、自分たちの社会的立場を、人間の重要な要求の充足と、明らかに社会政策的課題の踏襲を通じて、確かなものにしようとする願望は、クラブと会員資格をもつ組織を、多様性へと導いています。異質な、部分的には矛盾した会員の利害をたばねることは、クラブの運営に多様性の管理という課題をつきつけています。多様性とつきあうことは、ますます難しくなっている課題であり、クラブの運営は、調整的、統合的力の必要に直面しています。したがって、多様性の管理は、異なった利害とますます複雑になっているクラブで方向性の指示との葛藤の管理であるともいわれています。自由意志による結合としてのクラブは、結局つねに会員の利害に合わされねばなりません。クラブの利害にもはや価値を認めない会員は、クラブを去ります。かれらは、多分他のクラブに入るか、自分たちで新しいクラブを創るのでしょう。

5 スポーツクラブにおける会員の発展

ドイツスポーツ連盟のスポーツクラブは、総じて、上昇を続ける会員数によって特徴づけられています。この増大傾向は、もちろん異なった年齢のカテゴリーや会員のグルーピングによっても違ってとらえられています。成人とくに高齢者のク

ラブ会員の増加にもかかわらず、子どもと青少年は相変わらず最も高い組織率を示しています。最近クラブは6歳までのところで高い増加率を達成しました。5人に1人の子どもが、この年齢でこの間スポーツクラブに加入しています。7歳から14歳の青少年の組織率は、64%で、少女は47%です。これに対応した数値で、15歳から18歳の場合には、64%と42%です。したがって、スポーツクラブは、青少年にとっては今もって魅力的なものです。しばしば反対の主張を耳にしたりはしますが、青少年が以前より頻繁にスポーツ種目を変え、クラブでさまざまな活動を試しているかぎりにおいて、青少年をスポーツクラブにつなげておく力は変化しました。ここでちょっと注意を喚起しておきたいのは、スポーツクラブのなかで女性会員の割合が全体として、この間、37%であるということです。したがって婦人はいまだに、人口の割合からして、数値を下回っています。このことは、とくに高齢の婦人に当てはまります。60歳以上の婦人のたった6%だけが、スポーツクラブに属しています。

学校外の青少年のコーチでは、スポーツクラブは、他のどこの施設にもないほぼ達成された高い位置を占めています。もちろん、スポーツクラブの大きさで、子どもと青少年へのスポーツの提供は、著しく区別されます。とりわけ、大きなクラブでは子どもと青少年の比率の高いことがわかります。

クラブでスポーツを行っている青少年は、とくに同年令の者との社会的触れ合いを評価しています。個々人のアイデンティティは、違った共同体への参加によって成立するので、同輩集団は、クラブを性格づけているトレーニング時間、競争からの解放、クラブのお祭りというような機会の枠の中でアイデンティティ形成に役立ち、したがってまた、青少年に特有な発展の課題の効果的な克服に役立っているのです。

ここでわかることは、スポーツクラブにおけるクラブ生活は、一般的なスポーツ活動に限られて

いないということです。つまり、クラブに関わる事柄と関わらない事柄についてのふれあいと交流は、重要な役割を演じているのです。人がスポーツをした後、・楽しい仲間の輪の中・に座っているなら、その人はインフォーマルな方法で、クラブ外のスポーツグループの共通の活動(に参加する)準備をしているのです。社会的ネットワークとしてのこのような正にクラブの質が、結果として社会的な選別の境界をとり除いているのです。“みんなのスポーツ”を実現する努力は、これまで社会的な不平等の完全な均等化を実現することはできませんでした。相変わらず低い階層のものよりも、高い社会層の者が、スポーツクラブのなかに多く見うけられます。

多くの住民グループのなかでは、教育準備性が希薄となり、組織への忠誠心が低下してきているのにたいして、クラブは——とくに大きなクラブは——このような人達にとってクラブが魅力的になるように、会員資格を新しい形態にすることによって妥協をはかっています。さらに、短期間の会員資格(たとえば3か月の会員資格)、また客としてクラブに所属することが可能であること、および“においをかぐコース”(お試しコース)でクラブが提供するものを知るなどということが加えられています。このような方法では、クラブへの加入のバーは明らかに低くなり、クラブはできるかぎりオープンとなることとなります。かくのごとき会員資格形態も、とりわけ、利用者にたいしてわずかな責任しか求めないという性格の特異性をもった営利本位の提供者との闘争にたいするクラブの回答として現れているのです。この開放性は、特別な表現を見いだしています。クラブがさらに非会員に提供を拡大するなら、多くの場合コースの形態に何が現れるのでしょうか。

6 スポーツクラブにおける協力者の状況

スポーツクラブにおけるスポーツは、もっぱら名誉職的な協力者によって運営されています。ス

ポーツクラブは会員の任意の援助によって活動しており、名誉職的協力の土台に支えられています。冒頭で言及した、会員によって選ばれた幹部は、名誉職的に、つまり、謝金を受けることなしに、仕事を行っています。スポーツクラブではおよそ220万人が名誉職的に働いています。より多くの婦人を名誉職の仕事に獲得するために、婦人の関わりを促進するための数多くの措置が開発されています。

経済的側面からみると、個々の活動しているスポーツクラブ会員は、会費として払っている額の4.5倍の金額を得ていることとなります。このように恵まれた(スポーツ)提供が可能になる基本的土台が、名誉職的なしごととの関わり方にあるのです。もしスポーツクラブの名誉職的活動を時間給30マルクの“陰の報酬”として換算するなら、およそ70億マルクを得たこととなります。

名誉職的協力作業の完全な中止が個々のクラブに適用されるということは、月の会費は、小さなクラブ(300人の会員まで)では、平均10から119マルクへ、大きなクラブ(会員1000人以上)では、平均23から57マルクへ、上げられねばならないことを意味しています。ですから、他の財源を開発することなしに、クラブの現在の(スポーツの)提供を保持したいと思うでしょう。小さなクラブの場合は、他の(スポーツ)提供に対して、もはや争う力を無くしてしまいます。子どもたちや青少年が試合に参加するために、コーチあるいは親による運搬作業のように、依然として無料でなされている活動は、本来支払われねばならないのですが、このような数字に、スポーツクラブ一般にとっての、また“みんなのスポーツ”というプログラムの発展にとっての、名誉職的活動の持つ基本的意味が示されています。とりわけ、大きなクラブは、質的に高いスポーツ提供を保障するために、また名誉職的な管理能力を支えるために、スポーツ指導部門と組織的部門で有給の職員をおいています。

7 スポーツクラブの財政状況

名誉職的性格と並んで、会費はクラブの古典的財源です。会費の高さはクラブ平均で実に低く、また、“みんなのためのスポーツ”という理念からしても、会員資格は社会的に閉鎖的となつてはならないでしょう。成人会員の平均月会費は、およそ 14 マルクです。もちろん、増大するクラブの大きさで会費は高くなっています。とくに、給与を払っている職員がいる大きなクラブは、他のクラブと比べると比較的高い会費を徴収しています。さまざまな住民グループの種々の財政負担を考慮するために、クラブは一般に異なった会費様式をとっています。障害者や失業者も多くの場合わずかな負担となっています。20 マルクあるいは 30 マルクという、成人にたいする非常に高い月会費ですら、まだ明らかに営利本位のフィットネスセンターの平均月額料金 80 マルク以下であります。

会員はクラブでの会員資格を得るために、会費を納めます。それはしかし、クラブの厳密に決められた記録達成行動 (Leistungen) のためではありません。会員は一般にクラブの全ての記録達成活動の提供を、いちいちお金を払わないで行うことを要求できます。このことは、すなわち、会費は、価格と市場の関係のように、記録達成かそうでないかの原理に基づいているのではない、ということの意味しているのです。

クラブでの記録達成活動の提供をわずかの範囲でしか利用していないか、もっぱら自分に関係する指導を見ているような会員は、こんな疑問をクラブに提出します。つまり、クラブの豊富な費用を必要としている高度な記録達成スポーツマンにだけでなく、財政的に貧弱な、社会的に周辺グループにも共同支出するために、つまり、全体の記録達成活動の中身を財政的に保障するために、果して会費をプールする用意があるのか、と。

会費は全クラブの平均で総収入の 39% を占めています。したがって、クラブは、——個々の場合に多かれ少なかれ——別の財源に頼らざるを得

ません。たとえば、非会員のためのコースの提供は、この関連でいえば、クラブの一般的な費用補償のために利用される、一定の提供で余剰金をうまくつくり出すという苦勞の多いことになっています。非会員にたいするこのようなコースは、健康保健組合、公共健康局あるいは老人ホームのような非スポーツ的な組織と施設との協力で遂行されます。その際問題となるのは、正に住民グループに利用されているが、これまでスポーツクラブの届かなかつた、一般的に健康と予防を目指した運動の提供であります。一般的にいつて、他の施設とクラブとの協力、またクラブ間の協力は将来意味をもつことになるでしょう。

ここでは全ての収入状況に立ち入ることはできません。しかし、次のことは指摘できます。すなわち、広告やスポンサーからの収入は極めてわずかの部分しか占めておらず、ほとんどのクラブには将来重要でなくなるであろうということです。クラブの 10% 程度がこのような財源からの収入を記録しています。

これに対して、国家的補助——とくに地方自治体への——はクラブにとっては、基本的な収入の位置を占めています。平均してそれは、クラブ財政のおよそ 15% を占めています。年間 5 億マルクが、とりわけトレーナー、運動指導者、スポーツ器具の購入、そしてクラブ所有のスポーツ施設の建設と管理・運営に補助されています。間接的な国家補助は、スポーツクラブによる自治体のスポーツ施設の無料利用を意味しています。クラブの 28% だけはスポーツ施設を自分たちの自由に使えますが、自由に使えないスポーツ施設の多くの部分は、とくに地方自治体では、(補助に) 頼らざるをえないのです。スポーツクラブは、他の希望者にたいして、地方自治体のスポーツ施設の利用に際し優先権をもっています。そこで、次に国家的スポーツ振興の基本についてお話ししましょう。

8 公共の福祉志向と公益性

スポーツクラブは、それぞれの目的設定のなかで自ら楽しむだけではなく、世間一般で目指されている課題を受けとめ、(社会的に)大きな影響を与えています。公共の福祉への志向をスポーツクラブは義務としていることによって、スポーツクラブは所轄財務局の提案に基づいて公益性のある組織としての承認を得ています。公益性を調整する課税規定に基づいて、一つの団体は、仮にその団体が、私欲なく、物質的、精神的あるいは倫理的領域で、もっぱらかつ直接的に、社会を啓発するものであるなら、公益性のあるものとして指定され得るのです。公益性の承認は、とりわけ、団体にとって税金からの解放へ、また、寄付者にとっては税金が控除されます。このような寄付を受け取ることができる可能性をひらいています。寄付の大きな意味は、すべてのスポーツクラブの3分の2が寄付を得ていることから知ることができます。寄付の総額は年間45億マルクに達しています。これは、平均して、スポーツクラブの財政の9%に匹敵しています。

国家とスポーツクラブとの関係は、スポーツのオートノミーの原則に従って制御されています。国家は、助成原則に従ってスポーツ組織を財政的に援助します。このことは、国家的な支援は、自助への援助として役立つ、ということを意味しています。十分な固有の財源をもっている団体は、国家的な補助金を得ることはできません。それ故、多くのゴルフクラブやテニスクラブは国家的補助なしのままです。

財政の特権を含めて、国家的スポーツ秩序の認定は、そもそもスポーツの公共福祉志向に由来しています。消費に補助金が与えられるのではなく、組織的スポーツの教育的、社会的、健康政策の影響が支持されているのです。特別な意義と責任が、子どもたちや青少年の世話にあたる運動指導者、トレーナーそして青少年指導者に与えられています。といいますのは、かれらを通じて公然とスポ

ーツモラルのエキスが伝えられるだけではなく、一たびたび暗黙に一般的な社会的価値、規範および立場も伝えられるからです。この社会化機能が、それに相応しい評価を要求しているのです。この評価は、子どもたちや青少年の世話で達成され、スポーツ連盟によって提供された訓練とその後の自己形成を通じて獲得されるべきものです。DSBによって発展したトレーナーのための不文律は、行動の方向づけに対する最近の例となっています。頂点スポーツの振興は、国家的な代表行為にたいする貢献とならんで、子どもと青少年および大衆スポーツにとっての模範機能からもまた正当化されています。それ故頂点スポーツの振興は、常に信じるに足る模範的人物としての頂点スポーツマンを前提にしています。国家が人間的記録達成スポーツを、これはつまり、かけひきから解放され、健康的であり、教育的であることに責任をもちうるようなスポーツを意味しているのですが、こうしたスポーツを、組織化されたスポーツに要求する限りにおいて、国家は組織的スポーツへの期待を強くつくりあげあるにいたったのです。

DSBによってイニシアチブをとられた、とりわけ社会的周辺集団をクラブに統合すべきであるという“スポーツの社会的攻勢”というスポーツ政策的プログラムは、社会経済的によりよくつくられている集団が社会的弱者に財政的援助をするような、堅実な社会としてのクラブの構想から出発しています。

一般的には、すでに言及した、クラブ活動の社会的基準と資金調達にむけてほとんどのクラブで実際に行われている、提供されたすべての会費をプールしこれを等級づけるという連帯思想が基礎にあるのです。

スポーツクラブは、確かに子どもと青少年にとっては、特に社会関係のネットワークとなっているのですが、しかし、それはまた他の社会的集団にたいしては、——高齢者の場合のように、一部は上昇傾向にあるが——社会的統合機能を引き受

けています。

このような実態は、伝統的な生活様式の機能が失われてきているという背景のもとで、観察されます。それは、たとえば、近隣環境の意味の喪失によって現れているのと同様であります。スポーツクラブは、自己同一化を提示し、地方的、地域的なアイデンティティの形成に貢献します。その際多くのクラブは、モデルと模範の性格を受け入れます。そして、クラブの会員だけでなく、多くの人達のスポーツ理解とスポーツの態度に影響を及ぼします。プロスポーツクラブでは、とりわけサッカーでは、この作用は、メディアの影響によって著しく強まっています。

9 個人と社会の仲裁部局としてのスポーツクラブ：第3セクターの自発的統合

スポーツクラブは、個人と社会制度との間を仲介するかたちで成立しています。そしてまた、大きな組織です。スポーツクラブは、“みんなのためのスポーツ”という目的設定のもとに、異なった世代、社会層と集団を獲得し、引き合わせるために、全社会的な統合を支持しています。経験的な研究調査結果によって必要になってきた相対化、それは、クラブによって充足された機能の実際 の程度に関わっているのですが、この相対化にもかかわらず、クラブは、依然として、お互いに結ばれることなく漂流する危険を常に孕んでいる複雑な多元的社会の“結合剤”となっています。自助施設として、スポーツクラブは、市場と国家的福祉とに比肩するものとなっています。スポーツクラブは、その社会的意義をまず、みずからの社会的自己組織のなかにはっきり現れているという事実から得ています。クラブは、自己および共同の責任形態への可能性を個人にあたえる、自己決定の形態を具現しています。全体主義的なシステムが結合の自由を制限し、共同体の形成を統御しようとするようなことは、偶然にもたらされるものではありません。“下から”という社会的課題をも

った組織の政治的に重要な局面のもとで、スポーツクラブは社会の具体的形成にとって重要な意味を獲得しています。この意味で、国家と市場との間に位置を占めているスポーツクラブは、ひとつのすぐれて政治的な構築物なのです。スポーツクラブは、“副政治”の担い手に属しています。それは、ウルリッヒ・ベックが、政治の独自の性格を、国家ではなく、文明社会に根づいているもの、と名付けたのと同様であります。規制緩和と公的予算の財政問題に直面し、市民社会の組織の重要性が増大しています。人間が、個人および社会的本質としての存在の基本経験を体験する場であるスポーツクラブは、いわゆる自由と結合、そしてまた、前議会制度的な空間における重要な共同的な財産、すなわち、民主主義への訓練という財産を創りだしているのです。まさに若い人達にとっての問題は、決定局面は彼らから遠ざかってはいないということです。なぜなら、彼らはクラブのなかで、自分で洞察し、制御された生活領域を共同でつくりあげ、共同で責任を負うことができるからです。このような参加可能性は、クラブのなかでたびたび現れる寡頭政治化の傾向に対抗することになります。

名誉職というのは、単なる財源——すでに財政状況のところで述べたような——であるだけでなく、そのなかには連帯的な態度、社会的なかわり合い、責任を負うよろこび、そして共同決定の願望が存在しているのです。弱まってきていますが、ともかく不十分なものとしてでも考察された名誉職のかかわり合いについての、多くの嘆かわしい問題は、多くの様々な会員を獲得するというスポーツクラブの成果と結びついているのです。多くの人々がクラブに入ればはいるほど、スポーツとスポーツクラブに対して、相対的にはっきりしない、狭く限定された、不安定な興味・関心しかもたず、わずかな結合の準備と低い義務的のかかわり合いしかもっていない人の割合はますます大きくなります。名誉職（的活動）の危機が存在しているかどうかは、ドイツで激論がかわされてい

ます。一方は、社会的個人主義化傾向による名誉職のかかり合いの後退を見ており、他方は、このような評価を経験的にみて正しくないと反論しています。

10 サービス領域と社会的共同体

ドイツのスポーツクラブは、サービス領域と社会的共同体の間に存立しており、しかもこのことは、個々の大きなスポーツクラブにも、スポーツクラブを総体としてみた場合にも当てはまります。もしスポーツクラブに公益性の要求をもった自主的な結合が残るべきであり、また国家と市場との間の特別な役割が保持されるべきであるとするならば、スポーツクラブにとっての（スポーツ）提供の形態は、・自己調達・を旨とし、わずかな結合意志およびわずかな義務的関わりしかもたない人の要求と、共同体に関心をもち組織に忠誠な会員資格をもった、いわゆる“古典的”な人の要求と保護とのあいだの尾根歩き（あいだを行ったり来たりすること）を意味しています。もしもつばら第一のグループと器具上の、予算上のまたサービス志向の利益保持で関わりをもつなら、クラブの基盤はぐらつきます。後者に集中するならば、人は、“みんなのためのスポーツ”という目的を放棄せねばなりません。すくなくとも、相当な増大を断念しなければなりません。それ故に、スポーツクラブにとっての発展のジレンマが浮き彫りになってくるのです。現在確認されることは、一方ではサービスを志向した大きなクラブと、他方では家族的な共同体の性格をもった小さなクラブが共存していくということです。

スポーツクラブの中には、さらにまた伝統的志向や現代的志向をもったクラブが存在しています。また、社会を総体として特徴づけているものが、スポーツクラブに反映しています。

将来の組織的スポーツの社会的役割は、どの程度、スポーツクラブの特殊性が守られるか、どの程度、自己自身の思考を他人のための存在と、つ

まり、ウルリッヒ・ベックのいう連帯的個人主義と結合することに成功するか、にかかっています。

（1999.11.16 一橋大学佐野書院において講演。
関春南・訳）